

新世紀ミュージアム

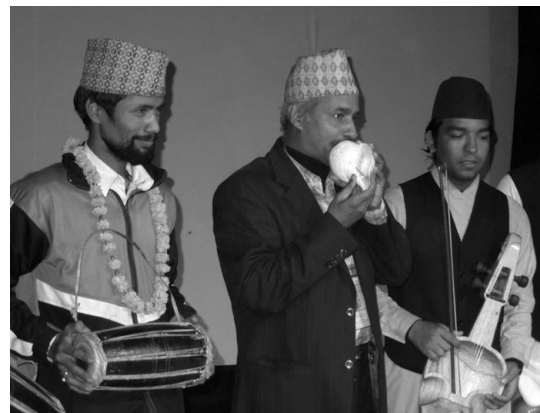
伝統文化を保存していくうえで、博物館の果たす役割は大きい。しかし、博物館維持には資金調達や環境整備など、さまざまな困難が伴うこともある。ネパールの伝統音楽を守るため、一個人が中心となって博物館を設置した事例を見る。



音楽博物館の外観。2階が展示エリアになっている(2011年)

熱意を支える博物館

タンカ(チベット仏教の宗教画)の販売を生業とするラム・プラサド・カデルさんは、ネパールの伝統音楽が日に日に失われていることに心を痛め、一九九五年のある日、一念発起して、楽器の収集や音楽芸能の記録に一生を捧げることを決意した。民俗音楽は古く



映画祭の開会式でサンカ(法螺貝)を吹きならすカデルさん(2011年)

ネパールの音楽とその振興を目的とする博物館の活動を世界にむけて発信することを目的として二〇一一年に始まった。昨年、第七回目を迎えた映画祭では、欧米、南アジアの民族音楽学者が制作した番組が二八本上映された。また、映画祭の前日には、消滅に瀕する民族文化の保全に関する国際シンポジウムを開催し、学術交流の場を提供する努力も始めた。

さらに映画祭では、大英図書館が所蔵する一九三〇年代の歴史的な映像を特別上映し、ネパールの豊かな音楽芸能が世界的にも注目されてきたことを紹介してきた。これらの古い映像を使っ

さい過去の遺物ではなく、ネパールの貴重な文化遺産であると伝えることが、伝統音楽の衰退に歯止めをかける唯一の方法だと考え、一九九七年に音楽博物館を立ち上げ、準備期間を経て二〇〇二年にカトマンズ市内のトリプレシュワル・マハーデヴ寺院に間借りする形で開館した。

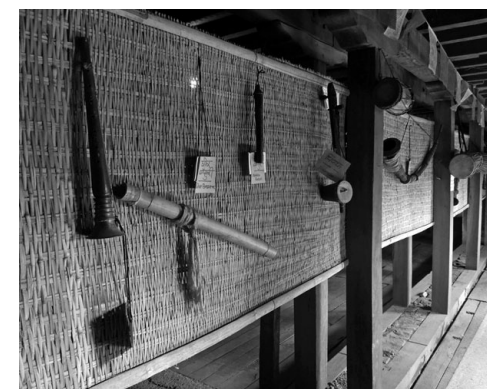
博物館が所蔵する楽器は約六五〇点。カデルさんが自らネパール各地に足を運んで集めたものがほとんどだ。そのうち二〇〇点ほどが常時展示されている。年代が特定できる最古の資料は、二〇〇年前に寺院に寄進されたナガラとよばれる太鼓。そのほかにも、現在では演奏の伝統が途絶えたり、作られていない楽器を数多く集めた。世界の楽器を網羅的に集める欧米や日本の楽器博物館に比べれば規模は小さいが、ネパールの楽器のコレクションでは最大の博物館に成長した。

カデルさんたちは、楽器の収集と並んで、伝承が途絶えてしまった儀礼を再興する試みも始まっている。

厳しい現実を抗して

博物館は公的資金をほとんど受けずに運営しているため、財政的な基盤は弱く、これまでに幾度も窮地に立たされてきた。私財を投じて博物館を運営するカデルさんの意気に惚れ込んだ友人たちがボランティアとして活動を支えているが、それでも対処しがたい事態は起こりうる。特に、二〇一五年四月にネパールを襲った大地震は、歴史的建造物に大きな打撃を与えた。音楽博物館が間借りしている建物は倒壊を免れたものの、大掛かりな補強と改修が必要となり、一度の入場者数を二〇人に制限せざるをえなくなった。年間二万五〇〇〇人あった来館者は、今では五〇〇〇人ほどに減少しており入場料収入も激減した。

さらに追い討ちをかけるように、建物の一角を借りていた寺院の管理組織(グティ)が、地震による被害を機に、二〇一六年にある大学と三五年間の土地の賃借契約を結んだ。大学は寺院を囲む四周の建物を再建して、あらたに校舎とする計画を立てており、博物館は早急に転居先を見つけなければなら



壁面に楽器をつるすだけの簡素な展示方法。キャプションも楽器の名前だけである(2012年)

行して、音楽芸能の映像記録にも積極的に取り組んできた。家庭用のビデオカメラで撮影した映像は三万時間におよぶ膨大な資料となった。そのなかにはすでに伝承が途絶えた音楽や儀礼も含まれている。収集映像のほとんどがアナログ映像であるため、デジタル化を進めたいが、外部資金に依存しているため一割ほどしか達成していない。

音楽映画祭

この博物館が母体となって運営している最大のイベントが、毎年一月に開催される「国際民俗音楽映画祭」である。世界各地で制作されている音楽映画をネパールで紹介するとともに、

ない。

そのような窮地に立たされても、カデルさんは前向きである。昨年は、国際伝統音楽学会におけるネパール代表者となり、国際的な音楽研究の場での足場を築いた。また大英図書館との関係を強化し、共同プロジェクトに取り組む計画を立てている。地震があった二〇一五年には映画祭の開催が危ぶまれたが、大奮闘してなんとか実施にこぎつけた。映画祭が掲げてきた「生存のための音楽」というスローガンが、この年ほど切実な響きをもったことはなかっただろう。博物館の生き残りをかけたカデルさんの闘いは続く。



映画祭に招待された子どもたち。彼らが伝統音楽の将来を決める(2012年)